

としよりやどいのぐち

「年寄り雇」

「愚痴」

五十嵐 武晴

一、「ハマエゾ」(浜蝦夷)と

「ゼゴ」(在郷)

※悪態語で「ハマエゾ」は、粗野・粗暴な人間という意、「ゼゴ」は、田舎者で海の仕事もできない人間という意で、漁師と百姓の互いの蔑称語。

「シヨウネ」(庄内)の言葉は聞き取りにくい・重苦しい・汚いというような見方をされてきました。しかし最近では味があるとか、深みがあるという見方をしてくれるようになったのが僅かの救いです。

同じ川南地区でも、海岸集落と水田集落とでは、ニュアンスを異にする言葉がみられます。

海岸地集落の言葉を「浜蝦夷言葉」、水田地集落の言葉

を「在郷言葉」と、つい最近まで互いに嘲笑しあつてきたものです。

註(一)江戸期の「俚言集覧」に「方言・郷語、甲は常に言へども乙は聞かざることあり。人或は乙が聞くこと無きを以て、一郷一人の私語かと疑へるものあり」とみえますから、

それぞれのお国言葉を嘲笑しあつたのは、昔からだつたことがわかります。

浜蝦夷と蔑まれた浜言葉も、註(二)松本修氏は「室町時代以降の京都、関西の流行り言葉だつた。京の都で魅力的な表現が流行すると、地方にじわじわと広がっていきました。あたかも「地を這う蝸牛」のようにゆつくりゆつくり旅をし、この言葉が今も辺境と言われた各地方に生

き残っている」だといいます。

江戸時代から連日、豊漁に湧いた濱中（浜蝦夷）の地曳網漁も、昭和の中頃から魚影も薄くなり、いまでは、大漁にわいた真鯛などその片鱗さえうかがうことができなくなりました。（最近、また多くなったとか）

地曳網漁の衰退と共に、納屋制度は崩壊し昔は九軒もあつた納屋は、昭和四十年代五軒。現在は一軒もない。漁とともに地曳網の漁言葉も風化し、知ってる人も年々数少なくなっていきました。

消えていく浜言葉、嘲笑された言葉だからと死語にして葬りたくないのです。漁を中心にして互いに語りかけ心の絆とし、共同体としての集落を結束してきた言葉なのです。だから次世代の人々に文字遺産として継承したい。

注

(一) 江戸後期、太田全斎の著とされる。近世の口語を集め、全二六卷よりなる。

(二) 松本修 全国アホ・バカ分布考「方言周圈論の学習」六四〇六六頁

二、地曳網漁の発祥

わが国の地曳網漁は、奈良時代に西国ですすでにおこなわれていたようです。

奈良期の^{註③}「万葉集」に、じつに生き生きと当時の地曳網漁が詠まれています。

聖武天皇の難波宮（大阪市・奈良時代の宮殿）を舞台にしたもので

^{註④}「大宮の内まできこゆ網曳すと網子ととのふる海人のよび声」とみえます。

また「あまぶね」という言葉もみえ、八世紀前半には網漁が確立し專業の漁師が活躍していたことがわかります。

また、^{註⑤}「延喜式」には、諸国から朝廷に献上された特産品の数々が記載されていますが、なかでも西国の鮎・東国の鮭の名がみえます。

^{註⑥}「和名類聚抄」には、西日本を中心に「海部」という地名がでてきます。この地名の由来は「海人」（あま

と称した漁労民達が浦から浦へと漁場を求め移動する生活をやめ、その土地に定住するようになったことから海部と呼ばれたのが「磯部」となり、今の漁村につながったと言われています。

この地名は三重・相模原市・相馬市・千葉市などにみられますが庄内浜には見あたりません。

鎌倉期に入ると、西国（伊勢・志摩＝三重県）の漁労民が東国に移り、高度な漁労技術を伝えたとされ、江戸期には関東で本格的な漁業が始まりました。

漁業の担い手は、西国から移り住んだ漁労民が中心でした。

註^①「浮世草子」には「ちびきの網は春より折りこそ増され……」とみえ、註^②「浄瑠璃」には「浦手のあご（網を曳く網子）数十人……」とみえます。

庄内浜の漁民が、西国の高度な漁労法を伝授されたという確たる資料はありませんが、間接的に西国の漁法を学んだと考えられるし、その際に関西言葉の漁労用語が取り入れられたことは、納屋言葉などからも推測できます。

注

（三）成立は八世紀後半とみられ、約四百年間にわたる歌約四五〇〇首が収められている最古の歌集で二〇巻よりなる。大伴家持・橘諸兄の説がある。

（四）第三、三三八首。

（五）十世紀初期の延喜年間に御醍醐天皇の命で編纂される。

（六）九世紀（九三一一九三七）における日本最古の意義分類の漢和辞書。源順。

（七）井原西鶴天保二年（一六八二）・浮世草子・好色一代男。

（八）近松門左衛門享保期（一七一六）浦島年代記。

三、濱中村の漁業と納屋

漁法はその集落のおかれてる自然の立地条件で異なってきましたが、濱中は、他の砂浜海岸、湯野濱・十里塚・宮野浦などと同じように、遠浅海岸での地曳網漁業がもつとも重視されました。

註^③ 言い伝えによると、濱中は比較的に大規模な高網

網の系統（加賀・石川県南部）を引く隣村、十里塚より技術を伝授され元和頃（一六一五〜二三）から地曳網漁業を始めたといわれています。

註十 濱中の開村が永和年間（一三七五〜七八）、註十二 十里塚村の開村が天正年間（一五七三）と言われている。いずれも口碑であるから粉飾されているにしても、濱中の方が宮野浦の枝村とされる十里塚よりは、約二百年も前に開村していたことになるのに、宮野浦の枝村より地曳網の志向が遅れたのは、収益のある塩焚き（製塩）を生業としていたからであつた。しかし、乱伐による塩木の減少（東山より塩木を購入するありさま）さらに北前船の西廻航の開発で、能登・瀬戸内の安い塩が移入されるようになるのと製塩は衰微して漁業に移行せざるをえなくなったとかがえられます。

註十一 （長井政太郎氏）は、十里塚に資料は存在しないがかなり早い時期、大体元禄期（一六八八〜一七〇三）頃には納屋元の成立を見たものとしてよかうと述べています。濱中の納屋元がいつ頃成立したのか確たる資料はありませんが、「濱中村遺書」に宝永三年（一七〇六）六月、

藩庁より、砂丘の東麓、出崎谷地（現、酒田市広岡）に家持（えもち・分家）を出すようにと命じられた時のことです。

註十三 「漁獵之障二相成家持差出候義迷惑仕候……」と新田への分家は曳子が不足し地曳漁業に支障をきたすという辞退願書を提出し許されています。この頃は納屋も成立し真鯛（にしん科・いわし科・おおばし大羽鯛——全長二〇センチ前後 ちゅうばし中羽鯛——全長一〇〜一二センチ）（かたぐちいわし科・かたぐちいわし）の魚影も濃かつたと考えられます。

地曳網も改良を加えられ、オアミ（大網——春・秋期の大羽鯛・かたぐちいわし用の網）コアミ（小網——夏期のあじ科・鯆用の網）と使いわけて網を曳きました。

藩庁は、濱中の願いを許し周辺の農村から廣岡へ移住させています。漁獲量が多く高率の免（税）が入ることから考慮したともかんがえられます。註十三 貞享三年（一六八六）十月、十里塚では地曳網船一艘につき、御役銀一株に金二朱、その後同じく披き鮭二本づつ献上しています。浜言葉の背景に触れてきましたが、十里塚の納屋が

制度として確立したのは貞享中頃（二六八五）と推定され
ると言いますから濱中は後になるでしょう。

注

- （九） 十里塚村誌 納屋の成立 一四七―一四八頁
- （十） 濱中村誌 田川郡京田通西郷組濱中村遺書圖面之裏書寫
- （十一） 十里塚村誌 十里塚のおこり 一九頁
- （十二） 濱中村誌 田川郡京田通西郷組濱中村遺書
- （十三） 十里塚村誌 納屋の成立 一四七頁

四、ヨバンゾー

濱中の「納屋元」、（納屋小屋＝海浜に建てられた舟小屋で、
漁具を入れたり、網を修理する場所でもあり、また宴会の場所でも
あった江戸全盛期には一九軒もあったといわれています）
が、明治期に入ると九軒に減少しています。濱中の草分
けと言われる小林・早坂・余語の三軒と六軒の旧家が納
屋主となり、それぞれの各家は血縁関係をもとにいずれ

かの納屋に所属（曳子）することが義務とされ、また納屋
主を変更するなど厳禁であったが、明治二十四年頃から
この定めも絶対的なものではなく破られるようにな
ってきます。

納屋元は、漁船・漁具などの経費一切を負担する代わ
りに、総水揚げの半分、二分の一をとり、残り二分の一
は「やどいしよ」（江戸期の毛吹草にみえ、やとひど＝雇ひ人
の平等割りと決まっていたが、ただこの決まりは春・秋
漁の時だけに限られ、夏漁は全て納屋元の自由とされて
いました。

納屋の組織には、いろいろの役目が決まっていて、中
でも重要ポストは

「やまよど」（山呼頭）（鎌倉期の古今著聞集にみえる「やま
うど」で、「やまびと」の音便）です。

参謀格で、一納屋に四く五名おり、役目は「いろ見」
（海水の色の变化）で、魚の「わぎ」（魚群）を発見すると自
分の所属する納屋船に旗・笠・着物などを使って連絡。
「やまよど」の力量が水揚げを左右するから、大きな権限
も与えられ、魚群発見以外の仕事は一切なし。時には馬

を飛ばし自船に連絡するなど、お互いどの納屋も必死ですから、声が荒くなるのは当然、舟子がどなられるのは日常茶飯事です。

「よばんぞー」（奈良期の万葉集に「よばふ」呼ぶとみえ。江戸期の浄瑠璃には「呼び使ひ」とでくる）という役がいます。地曳網船をおろす時は、納屋元の連絡係が各曳手の家の窓から、一声「よばんぞー」とどなって舟子の家々を走り回った。「よばんぞー」とは「風になったから舟をおろすぞー」ということ、一刻を争う時にそんな流暢なことを言っているゆとりはない。鰯は生き物、じつと同じ場所に留まっている訳がない。そして各納屋の競争です。他の納屋に遅れたら、網をかける場所もなくなってしまうのです。

この声を聞いたら老若男女を問わず、どんな仕事も投げうって浜に走りました。

以前、梶尾（スギオ）神社の祭典が濱中に当たった年、祭典行列が厳かに繰り出された時、「えわし、きたぞー」の一声。御神体の神輿は松林の中に放り出され、神官一人が残されたということです。これ以後、濱中に神宿は当

らなくなつたという話も残っています。

鰯群が発見されると、舟子の年寄りが学校に着て、グランドから「えわしだー」と怒鳴ると、舟子の子ども達は、授業をほうり出し、浜に行つてしまい、教室には広岡の児童だけが残り、授業にならなかつた。子どもであっても、貴重な労働力、網を曳くと小学生は半人前の魚をもらえたからです。

翌日は疲れて、授業中眠り掛け。このため学校では、親達と話し合いをし、子供達を漁に引つ張りださないよう取り決めまですしています（昭和二十八年・濱中部落史・濱中尋常高等小学校編）

舟子が三〇人位集まると船がおろされました。地曳舟の大きいのは長さが六く七間（約一三米 幅二米もあり、地曳網の長さは四百尋内外（七二〇米）もありました。長さ五米、幅一・五の小舟（てまんこぶね＝伝馬舟）二隻も使われました。

船中には地曳網の指揮者として、三役がいました。

「ともどり」（艫取り・船頭）艫權を受持ち舟の操縦にあたる体力のある者。（江戸期の浄瑠璃にみえます）「しえんどう」

（船頭＝室町期の狂言にもみえる語）

「ながざ」（中座）二人で曳網の操作や網をおろす責任者・漁具の整備と積み込み。（鎌倉期にみえる「中」まんなか、「座」居場所、舟の中に座りながら繋いでいくことから中座）

「ながのり」（中乗）魚群を見定め罫取りに合図をしたり、漁撈を判断したりする。「おもてし」（表師＝平安期の宇津保物語にみえる専門家の意）

乗り組み員は、「いじばんげ」（一番権）一番権は舟の舳に座って權を漕ぎ、錨をおろしたりするが、波をかぶる事が多く体力を必要とした。人数は二人で次期の船頭はこの中より選ばれる慣習となっていた。舟は通常一艘で大舟と称し二〇人乗組が普通で、二番権・三番権と舟の席順が決まっていました。

乗組員は上位の命令には、絶対服従という上下関係が明確になっていました。

舟の船頭と陸の参謀格「ヤマヨド」とは常に連絡がとられ、このような組織をもとに「ヤマヨド」の命令が徹底され、統制のとれた地曳網ができたのです。

地曳網漁場の地先水面は、百二十間（二二六米）から二百間（三六〇米）の区域を陸上に立てられた標木（地曳境

木）によって分割して一漁場とし、その漁場に一番先「ケ」（權＝かく＝奈良期万葉集にみえる）一本、縄のはしくれを入れただけで、その漁場の最優先權の獲得になったからもう必死です。この場制度は集落の多い川北で成立、後川南も場割制を取り入れる。

どの納屋がどの漁場を使用するかという定めはなく、一刻でも早くついたものがその漁場の占有權を有するようになるので、各組とも魚群を追って猛烈に競り合い、時には紛争になることもしばしばでした。

たまたま、隣接漁場の境に魚群が来た時などは、流血の争いになったり、隣村十里塚とは漁も止めとつくみあいの「エサゲ」（いさかひ＝喧嘩・平安期の宇津保物語にみえる語をし、意気洋洋と漁獲〇の勝利宣言をして帰ってきたとか。

漁場を速く獲得し、魚群の移動に遅れないためにも、網を掛け回す時は一刻を争います。（註） 網の廻し方は魚群の方向で南の方へ廻す「上りゴ」（のぼりこ）＝（鎌倉期の保元物語に、上り・下りがみえる）と、北の方へ廻す「下りゴ」（くだりこ）とがあったが、大抵は「下りゴ」（ゴ＝期

―時・平安期の蜻蛉日記にみえる語でした。網を廻す時は「ヤマヨド」の合図で、魚群の移動方向や位置を知り網を廻しました。(シヨ) (潮Ⅱしほ・平安期の源氏物語にみえる語)

^{註 千七}「地曳網は季節によつて、獲る魚が違いますから網にもいろいろありました。まず春五月〜六月に「コビラ」(うるめいわし科・うるめいわし)をとる網を春網と呼び、獲れた鰯は砂浜の上に投げ干しにして「ホシカ」(干鰯・鰯を乾燥させた魚肥)にした。この時の配分率は納屋元五分・網に出た者が五分。七〜九月には、「エナダ」(あじ科・ぶり)「サバ」(さば科・まさば)などを獲るのを夏網といつて、網の中が小さく、網目も粗く軽いので、納屋元が自由に網を下ろしました。この網を「コアミ」(小網)といつて、参加したのは納屋元の家族・村の老人・婦人・子供達、納屋元の舟子以外の者でも参加できました。夏網の配分は参加者平等で、納屋元の家族一人一人にも配当しましたから納屋元には相当の収入が入りました。」^{註 千五}
平成十年頃から浜中地曳網の漁友会が発足し、八月末から十一月末頃にかけて小網地曳網が復活しました。漁獲は「鰯」(あじ科)「鱈」(さば科)「鰯」(うるめいわし科)などです。(浜中・菅原敬治郎氏談)

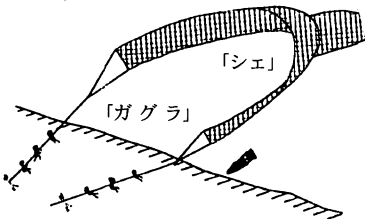
地曳網で最も重要だったのは、秋の「オオアミ」(大網)で獲る「エワシ」(鰯・かたくちⅡかたくちいわし科・かたくちいわし。こびらⅡうるめいわし科・うるめいわし)でした。

この漁は、十月〜十一月にかけて行われ、網も大規模で、納屋元の制約も厳しかったようです。風の日は^{註 千七}朝五時頃から曳いて、一日に四回も曳くことがありました。一回の曳くのに一・五時間〜二時間位。

この大網の操業期が十月〜十一月、水田の収穫期でもあったが^{註 千八}(大正五年、濱中の戸数二三〇戸、半農半漁が大半で、農業だけで生計をたてるものは二〜三〇戸で農漁の分岐点がこの頃で、それまでは漁業が支配的役割を占めていたと考えられます。しかし、寛永三年、百石六斗式升五合とあり水田耕作は江戸期から行われていた漁獲の多い年は地曳漁が優先的に考えられ、稲刈りは後回しにされました。

舟で魚群を追い網をかけ

○地曳網



東田川郡郷土教育資料 抜粋

廻して網を陸にあげる時、最初に網の網を取るのが「デジナトリ」（台綱取り）地曳網の引き網を取る役。平安期のダイは規模が一番大きい、網は太くて丈夫な網の意）この役は、若者の中でも特に威勢が良く、水泳の達人な者が、四々五名選ばれた。急を要する時は、網を陸に届かない数間先の海に放りだして、網をかけ廻すから、どんな寒い日でも海中に飛び込んで台綱を岡に運ぶのが役目です。

いよいよ網を曳く時、海底と網の足（下辺）とに隙間を生ずると魚が逃散するので「アシツケ」（足付け）魚が逃げないように網を足で押さえる役。足＝平安期にみえる）と称して七々八人の若者（十八々二十五歳位）が選ばれ、水中に潜って網の下辺を海底につけた。「アシツケ」は一回四人で交替制。この若者は舟にも乗らないで、焚火に当って海中に入るのを待っている。「ガクラ」（岸辺から急に二米位の深さになる。波の働きでおこり五米も沖に行くと浅くなり三〇センチ位になる。これを「シエ」（瀬）と呼んでいる）に袋網が近付くと、海中に入る。（この語源は、鎌倉期の「かく」と古代の「くら＝座」が結びついて、物の一部分をなくした所？」水温の低い四々五月・十々十一月に冷たい海中に飛び込む

役です。寒中の労苦を労わるため「アシツケメエ」特別の手当として、その日獲れた最上の魚（鮭）などを与えました（メ＝まひ＝弊で謝礼の品として贈るもので、万葉集にみえる）

同じ海中に入る役に「ハヨボイ」（平安期の源氏物語にハヤウ＝速くとみえ、江戸期の浄瑠璃にボイ＝追うとみえる）がいる。夏の小網に入る「エナダ」（あじ科・ぶり）など泳ぎの速い魚が、網を飛び越えないように浮き樽につかまりながら「ハヨウ」と大声をだしながら網の外から海水をかけ、魚が網から逃げだすのを防いだ。夏の海に入るのですから「ハヨボイ」の、特別手当はなし。

船頭以下各自がそれぞれの部署につき船が沖に漕ぎだすと（註 下九）「岡（おが）」にいる女達は、船の進む方向を見ながら船に遅れまいと、南に北に波打ち際を走りました。「デジナトリ」が海中に飛び込み台綱を岡に上げれば、そこが「デナバ」（手慣れ場＝平安期の後撰和歌集にみえる）として主に女達の網を曳く場所になる。網を回した船がもう一方の網の端を持って岡に着くと、そこが「イツブネバ」（＝船場）と称して、船に乗っていた男達が網を曳き

ました。

この「デナバ」「イップネバ」という呼び名は、十里塚の言葉で濱中ではみられません。

網をかけ回す「バ」（場所）を取る時は、「サイマ」（決められた漁場の区域・さいゝ際―きわ。まゝきわ―際で奈良期の万葉集にみえる）にまたがつて網をかけることは禁じられ、必ず区域内で行うという取り決めが、納屋間で交わされていました。

わずかでも他の納屋の「サイマ」に入った時は非難され、時には紛争の原因ともなりました。

網を曳く時は、網が海底から浮き上がらないように曳きました。

運動会の綱引きのように力まかせに曳いたのでは、網が浮き上がり魚が逃げてしまいます。そのため生活の知恵として考えだされたのが「フコ」（ふこゝひこゝ―曳くで万葉集にみえる）という網曳き用の道具です。

「フコ」は、至って簡単な網曳き用具。腰で曳くために腰に当る部分が長方形の板ででき、本綱にからませるため縄の先に重りがついていたので本綱に投げるとくるり

と巻き付き、手で結んだり解いたりする手間がかからない、まさに生活の知恵から生まれた「フコ」でしたが今では目にすることもできなくなりました。曳き子達は「フコ」を腰に当てじつくりじつくり腰と足を使って網を曳きました。網がくると「ヨヤサ・ヨヤサー」と掛け声を出して曳いた。（二袋得れば、三畝歩（三アール）一網ヨヤサー）。このかけ声は「湯野浜の歴史」一六二頁にでてくる掛け声です。

漁獲された鰯が浜に長方形に並べられると、いよいよ「マストリ」役（拵取り・ますゝ江戸期・とりゝ平安期の語）の出番。「マストリ」は「アバ」（京都の地方語で、三十歳以上の既婚女性を称す語）達に分配する。この鰯の価格は納屋毎で決められた協定価格で、「アバ」達に（仲買人という形）に卸されました。「アバ」は各舟子の家からそれぞれ一名の女性がこの役に当った。「マストリ」は、「アバ」達に鰯を渡すとき、漁獲の多い日は拵目より多い目分量で計り、少ない日には拵で計るなど拵目をその日の漁獲で加減して、「アバ」の利益を考えてやれる気の利いた「マストリ」は「アバ」達から人気があったことは昔も今も変わらなかつたようです。

販売担当の「アバ」（既婚女性）達は「ツキアキヨド」から買った魚を「フリカゴ」（かご＝籠・江戸期にみえる。鯛の運搬具で天秤式に棒の先に竹籠をつけたもので、肩に寄せ振れ売り歩くことで江戸期の浄瑠璃にみえる）^{註（十）}「獲れた魚は、浜での卸し売りはしないで、鮮度のよいうちに（振籠）に入れ、売りに行きました。大漁の時は、十貫匁（三七キロ）もある振籠をかつぎ、得意先を回り買ってもらった。」とあります。昭和中期頃になるとリヤカーが主流となり、「振籠」は姿を消していきました。

なまものですから生きのいいうちに早く売るほど値段が高いから、肩の調子を取りながら小走りで近郷近在を小走りで売り回りました。濱中は「人会浜」ですから、中買商人と関係なく自由に売ることができたので、値段も安く新鮮でしたから近近郷から歓迎されました。

「アバ」は自分の売上げから、決められた金額を「ツキアキヨド」に納めれば、残りは自分の家の「臍繰り金」の臨時収入になるのですから、小走りにもなりません。

その時の服装は、紺の「モンペ」（モモヒキの音変化した語）、みじか着物にわらじばきで、腰に弁当袋をさげた身

軽ないでたちでした。頬かぶりをし、雨の日は、蓑に菅笠を被りました。

^{註（十一）}湯野浜では、昭和五年頃にめかた（目方）売りになりましたが、それまでの魚代金は米や大豆で受け取ることが多かったといえます。また冬期間に農家から借れた米が返せなくて、農家と縁組するというようなこともおこなわれていた。とありますが濱中では聞いたことがありません。

昭和に入ると「アバ」の行商範囲は、近在だけでなく、鉄道を利用し（大正三年に陸羽西線開通・同十三年羽越線開通）、余目駅から汽車に乗り内陸の新庄・楯岡・天童方面にまで出かけています。（この時生まれた言葉が「キシヤタラカゴ」＝汽車鹽籠です）

販売は、春網で獲れる真鯛（大羽鯛）などは生売りだったが、大漁の秋網「かたくちいわし」の処理は「アバの小売りだけでは処理しきれない。

^{註（十二）}このため曳子の家に一軒ごと現物で配分。配分された鯛は各自「タラカゴ」で家に運び、簀干し（すばし）にして「タヅクリ」（田作・室町期の語・ホシカ＝干し鯛＝

肥料用)にされました。配分の計算は男子十六歳以上一人前、十三く十五歳半人前、女子十四歳以上半人前とし、一軒分まとめて三ツとか二ツ半と分けた。干し場は各々決まっていた、乾燥期間は普通五く六日、なるべく早い時期に問屋に販売していました。

また干鰯(ホシカ)にするほかに、「ヤギボシ」(焼き干し)にするため、浜で火を焚き夜も寝ないで鰯焼きをし(雨天の時は納屋小屋内)、加工できないほどの大漁の時は、生のままで肥料として売りました。煮たり・焼いたり・干したりするのは女・子供や年寄り達の仕事でした。(翌日、子供達が授業中うとうと眠りかけするのは浜中・十里塚村同じでした。)

納屋小屋から離れた場所で、大漁の鰯が上がつた時は「タラガゴ」(鹽籠)で各自家に運んだり、「テマンコブネ」(伝馬船江戸期の語で荷を岸に運ぶ小型木造船)で納屋小屋まで運びました。

納屋の会計・書記担当役「ツキアキヨド」(つきい月。あきよどいあきうどーあきびとー商人。いずれも平安期にみえる語)は、その日の地曳網に参加した者の氏名、鰯を卸し

た「アバ」の氏名と魚の高(量)を帳面に記帳、また、「アバ」が売ってきた販売金を受け取り、当日の総販売金を納屋元と舟子に割合により分配する役であつたから、字が書けて計算のできる人が選ばれ、漁獲物の決算は一任されていました。

「アバ」達から、その日の売上が「ツキアキヨド」に納められると「ツキアキヨド」は帳面を調べ、売上全額の半分を納屋元へ(春秋の大網地曳漁の時だけで、夏の小網地曳漁の売上は全額納屋元分)残り二分の一の配分は舟子分となり、職分(船頭・中座等)によつての差はなく、平等に分配されました。

当日参加した男子十六歳以上は一人前の配分・十五歳以下十歳までの男子と「オナゴ」(女子)は半人前の半分十歳以下の子供の仕事は「ミシトリ」役。(みしりめしー飯・江戸期の淨瑠璃にみえる) 早朝、納屋にでかけた家族に「フロゲ」(ふるげいひるげー屋食・江戸期にみえる)の「ワツパ」(わいわけものー曲げ物・杉などの薄い材料を曲げて、丸い容器を作ったもの)を届けるのが役目でした。

一日の漁が終わると、「ナメ」(ナメイダとも言い船を岡に

引き上げる時に船の下に当てる滑り板。なめる「滑る」で室町期にみえる語」と「エロ」（船を岡に上げる時、船の下に当てる丸

太。ころぶ「転ぶ」ころがるで室町期の狂言にもみえる語）を使つて船を「オガ」（をか「岡」陸で鎌倉期に見える語）に「スエ

ル」（すゑる「据える。平安期にもみえる語。船を船小屋に仕舞うのは漁期の終わる十二月になつてからです。「アミ」

（あみ「網。奈良期の語で漁師の意でもあつた。江戸期、地引き網の網を引く者を網子「あごと」も言つた）を網干し場に片付けると、納屋小屋で「ナンチン」役が料理した浜煮を「ゴツツオ」（ちそう「馳走。平安期の今昔物語にもみえる）にして夕食（バンゲノミシ）をとりながら、談笑の中に一日の仕事が終わりになります。時には納屋元から酒がでて宴会になることもありました。

「ナンチン」とは、料理担当の賄役、一納屋に二人位いて男の年寄り格が当りました。

「ナンチン」という語源は、奈良時代に遡るようです。「サカナ」というとすぐ「魚」を連想しますが、平安時代は「サカナ」とは言わず「ウヲ」が魚類の総称で、「源氏物語」には「イヲ」（魚）とでできます。古事記（七二二

や鎌倉期の「増鏡」（二三三三七六）には「マナ」（真魚）とみえます。

「サカナ」は「肴」とも書き「酒菜」（さかな）が原語とされ、「菜」は野菜という意ではなく食べ物の総称で「添」（そえ）といい酒のつまみを意味したと言います。「枕草子」にも「添」とあり、この「添」の字が「菜」に似ているので書き誤つたとされ、これから酒・御飯に添えてだす魚・野菜・肉などの全てを「酒菜」（さかな）が「ナ」となり、「肴」は魚・野菜などの副食物の総称だったので。（奈良期、「日本書紀歌謡」にみえる）

「ナンチン」の「ナン」は、この「ナ」のことで、「チン」は、室町期の「狂言」にも見える「チソウ」（馳走）の訛で、「ナ」を準備するために走り回ることから「馳走」という言葉が生まれたとされ、浜中だけに残る言葉ですが、この言葉を知る人も少なくなり死語となることは確かです。でも、浜料理の賄言葉「ナンチン」に歴史を感じるのとは「としより」私一人の「ざれごと」かも知れません。

舟子間の分配は、ヤマヨドもツキアキヨドも曳子も全

て平等、とにかく網にくつついてさえいれば十六歳以上の男子は一人前、十歳から十五歳までの男子とどんなに男まさりでも女子は半人前という関係でした。

納屋元は一万刈千町歩の家柄に相当すると言われ、漁業関係の分配などには一切口出しなどはせず、舟子にまかせていました。一万刈という家格に対する誇りがそうさせたのかもわかりません。

註(二十三) 「昭和三十年頃には、納屋数が九軒から四軒に減っています。また、曳子として「ゼゴ」(在郷・農村部の農民達が「ヤドイシヨ」(雇い衆)として、農閑期を利用し働きにきました。朝が早いので納屋元の「デドゴベヤ」(台所部屋)に寝泊まりしていました。」と言います。

各家が九つの納屋にそれぞれ所属していた頃は、納屋元は集落の指導的階級で、漁師は百姓を嫌って「ソエダキタネカツコシテ エサヘエンナ」(そんな汚れた姿で家の中に入るな)と言ったことが嘘のようです。

昔(昭和以前)は一日、網を「フグ」(曳く)ど、「シケ」(時化・海が荒れる)で二〜三日位、漁を休んでも暮らせるだけの漁獲がありました。毎日のように「ツジダラケ」

(泥まみれ)になり野良仕事をするよりも収入がありました。収穫もない田畑でも一定の年貢を納めなければならぬから、厄介ものとされ隣の集落の間では酒を一升つけるから田を貰ってほしいとか、そんなものは要らないから返すとか、今では考えられないようなことがあったと言われています。

註(二十四) 「地曳網に伴う分配の平等・服従と協同・血縁の結びつきは、浜中集落の村作りの上に大きな影響をもたらしたと考えられます。」

しかし、昭和年代の伊勢湾台風(昭和三十四年・一九五九・九・二十六)以来、浜中の地曳網納屋は影を消してしまいました。註(二十五) 「納屋の崩壊は「潮流の関係と魚付け林の伐採のため」(昭和七年・濱中の郷土調査、濱中小学校資料)、「出稼ぎ」による男子の不足(漁村の生活を見る)、「海水温の変化による魚類の減少」(海岸砂丘地帯の地理的景観・長井政太郎)、「商業資本の作用」(漁村の歴史)とさまざま言われています。」

納屋にとって最大の打撃は、春秋二回の鰯が岸に寄り付かなくなったことです。一艘の地曳網船と一張の大網

で二〇〇に余る舟子の家族達を、総水揚げ量の半分で支えていくことは、とてもできなくなったのです。

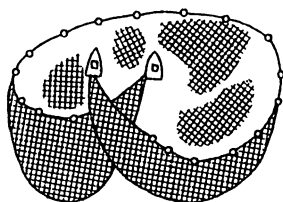
「チャッカ」(焼玉発動機船) が現れ「アグリ網」などの改善で、沖合で魚が捕られるようになってからは、地曳網漁は全くの不振となりました。「チャッカ」を庄内浜で最初に導入したのは、加茂村で明治四十五年、濱中では昭和中期になってからである。この頃庄内浜に四一隻。

地曳漁の不振は今まで網を曳くために欠かせなかった大家族制度が、納屋の余剰人口となつてしまい、家族の余剰人口は「出稼ぎ・離村・漁師以外の労働者・農業」への転向と言う形で現れてきました。

この頃取り入れられた「建網・刺し網・手繰網」などは、納屋網とは全く性質の異なる漁でした。

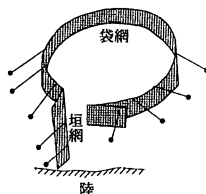
入り浜という漁港を持たない砂浜漁業、納屋の崩壊は集落の崩壊にもつながる

○きんちやく網 (巻網)
あぐり網



「たであみ」定置網

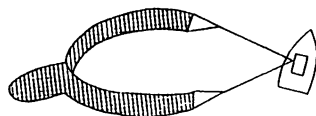
濱中での「たであみ納屋は、菅原家と川村家の二軒。たて=桶一盾といふ奈良言葉にもみえる語で、上下、前後の方向ということから、網のかけ方からきたという意がわかる。定置とは、その場所に設置し、鮭の入るのを待ったからであろう。



「さしあみ」刺網

刺しという語は、室町期の狂言にみえ、魚が網に刺さることからきた言葉と考えられる。

地曳網によくにている。
好きな所に動いていける。



「ふねびきあみ」定置網

地曳網によくにているが今の底曳網である。

事態。濱中の人達は、どんな手立てで集落の更生と転換を試みていったのかを探り残したい。

五、結びに

今も昔も、それぞれの風土に支えられ・長い時間をかけ人情や気風に育まれてきたお国言葉（方言）は、その土地の人々が心を通い合わせるのにもっとも便利な言葉であることは間違いありません。

マスコミの発達や交通網の充実で、今日では共通語や流行り言葉が、短時間で全国に浸透するようになり、その土地、その土地のお国言葉は淘汰されて死語なりかけていますが、隣の三川町などでは「全国方言大会」を毎年開催、お国言葉の再認識を図っている町もでてきました。

註（二十五）「清水義範氏」は「共通語は全日本のどこでも通じ便利だが、共通語は必要上生み出された便宜的な言葉でもある。（明治の義務教育制度化）方言と呼ばれているお国言葉こそ、由緒も歴史もあるもとの日本語だったというのです。

共通語を的確に使いこなせることは大事であるが、お

国言葉を風化させてはなりません。その土地の生活習慣や物の考えかたと深く結びついていることに気付くことで、育った土地が異なっても相手を理解することにつながる。」と述べています。

註（二十六）「佐藤稔氏」は若年層の言語意識についてふれています。「中・高年世代が持つている方言は悪い言葉という考えは希薄で、味がある・面白いとか評価するようだが、しかし、方言が自分にとって必要という意識はない。若い人はすこしでも地域や家族の言葉に耳を傾ける姿勢が欲しい」とも言います。

年寄りはその忘れがひどくなり、だんだん記憶も薄れてきます。

言語遺産を継承したい考えても、年々身体がきかなくなつてきます。願いは若い人達に何かを得ようという学びの心をもつて、お国言葉の継承を考えてもらえないだろうかということなのです。

こんなことを言うと、先祖から「アチャケ」（馬鹿者）「エマノジデエナエコグナダ」（今の時代に何を言うのだ）と必ず……。

「ワリガエル」(叱られる)かもしれない。この「ガシコモジャロ」(ゴミのような)の「モジクタリネ」(一人前のない)「ごど」「ソウナ」(言うな)……。

「ソワネモンダ」(言わないものだと言われても言いたい)みんなでお国言葉を大事に残していこうではありませんか。

朝日新聞の天声人語に「方言には独特の力がある。」(二〇〇三・八・十三・朝日新聞・天声人語)とあった。

その中に、方言詩の草分けともいわれる坂本遼の「春」を冒頭にとりあげ、

「おかんはたつた一人 峠田のてつぺんで鍬にもたれ
大きな空に 小ちやいからだを ぴよくり浮かして 空
いつばいになく雲雀の声を ぢつと聞いてゐるやうだ」
(「日本の名詩」山本太郎編・平凡社)

「おかん」を「母」に置き換えてしまつたら、この詩の魅力の大半は失われてしまう。

また、川崎洋編「日本方言詩集」(思潮社)の「おかやん土のなかはぬくいか」に始まる西岡寿美子にもふれ土地と人と言葉のつながりを強さを痛感させられるとも言つ

ている。

墓参りをされた方は、亡き父母・兄弟・姉妹・先祖にどんな言葉で呼びかけられたのだろうか。

あなたは共通語で語りかけますか。それとお国言葉で……。

注

(十四・十五) 十里塚 村誌 一六〇〜一六一頁

(十六) 浜中漁友会 前会長

(十七) 浜中・元納屋元佐藤富雄氏談

(十八・十九) 濱中部落史

(二十) 濱中部落史

(二十一) 湯野浜の歴史

(二十二) 濱中部落史

(二十三) 浜中・元納屋元佐藤富雄氏談

(二十四・二十五) 昭和七年 濱中部落史

(二十六) 清水 義範 大名古屋語辞典 三頁

(二十七) 佐藤 稔 秋田のことばⅡ秋田のことばの現在・

過去・未来一三九頁

参考・引用文献（図書）

- (一) 秋田市教育委員会 秋田のことば 無名舎出版 二〇〇〇
- (二) 赤木三兵 アイヌ語小辞典 さんおん文学会 一九七四
- (三) 阿部三郎 旺文社古語辞典 旺文社 一九七一
- (四) 阿部宗明 原色魚類検索図鑑 北隆館 一九六三
- (五) 大橋信夫 京ことば辞典 東京堂出版 一九九二
- (六) 大橋信夫 方言小辞典 東京堂出版 一九九九
- (七) 奥山益朗 罵詈雑言辞典 東京堂出版 一九九九
- (八) 工藤栄太郎 大鳥方言集 東北出版企画 一九九六
- (九) 剣持右作 越佐の方言 郷土出版社 一九九九
- (一〇) 後藤政之助 北荘内方言集 林昌出版 一九七三
- (一一) 佐藤雪雄 山形県沿岸漁村の方言 阿部久書店 一九七四
- (一二) 清水義範 大名古屋語辞典 学習研究社 一九九四
- (一三) 拙 書 濱中邑誌 あしたの夢企画 一九九九
- (一四) 拙 書 濱中自然探訪 自作 二〇〇一
- (一五) 拙 書 濱中の言葉 自作 二〇〇〇
- (一六) 拙 書 真室川町平枝のことば 自作 一九九〇
- (一七) 竹内理三 角川地名大辞典・山形県 角川書店 一九八一

- (一八) 谷山 茂 新修国語総覧 京都書房 一九九二
- (一九) 角川源義 角川漢和辞典 角川書店 一九六三
- (二〇) 長井政太郎 十里塚村誌 十里塚部落会 一九六五
- (二一) 濱中尋常高等小学校 濱中の郷土調査 濱中小学校 一九三二
- (二二) 濱中尋常高等小学校 濱中部落史 濱中小学校 一九三九
- (二三) 廣幸俊彦 国語総合便覧 中央図書 一九七六
- (二四) 古岡秀人 学研新世紀大辞典 学習研究社 一九七一
- (二五) 福武聰一郎 福武古語辞典 福武書店 一九八八
- (二六) 前田勇上 方語辞典 東京堂出版 二〇〇〇
- (二七) 松本 修 全国アホ・バカ分布考 太田出版 一九九三
- (二八) 緑川 亨 岩波国語辞典 岩波書店 一九六三
- (二九) 山形県 山形県漁業誌 山形県 一九九七
- (三〇) 山口 壽・秋保 良 湯野浜の歴史 湯野浜地区住民会 一九九四